

紫式部日記(一)

紫式部

正月一日、坎日なりければ、若宮の御戴餅のこと停まりぬ。三日ぞまうのぼらせ給ふ。

ことしの御まかなひは大納言の君。さうぞく、朔日の日は紅葡萄染、唐衣は赤いろ、地摺

の裳。二日、紅梅の織物、搔練は濃き青いろの唐衣。色摺りの裳。三日は、唐綾の櫻がさ

ね、唐衣は蘇枋の織物。搔練は濃きを着る日は紅はなかに、紅を着る日は濃きをなかにな

ど、例のことなり。萌黄 蘇枋 山吹の濃き薄き 紅梅 薄色など、つねの色々をひとた

びに六つばかりと、表着とぞ、いとさまよきほどにさぶらふ。

宰相の君の、御佩刀とりて、殿のいただき奉らせ給へるにつづきて、まう上り給ふ。

紅の三重五重、三重五重とまぜつつ、おなじ色のうちたる七重に、ひとへを縫ひかさね、

かさねまぜつつ、上におなじ色の固紋の五重、桂、葡萄染の浮紋のかたぎの紋を織りたる、

縫ひざまさへかどかどし。三重がさねの裳、赤いろの唐衣、ひとへの紋を織りて、しざま

もいと唐めいたり。いとをかしげに髪などもつねよりつくろひまして、やうだいもてなし、

らうらうしくをかし。丈だちよきほどに、ふくらかなる人の、顔いとこまかに、にほひを

かしげなり。

大納言の君は、いとささやかに、小しとふべきかたなる人の、白うつくしげに、つづ

つづとこえたるが、うはべはいとそびやかに、髪、たけに三寸ばかりあまりたる裾つき、髪

ざしなどぞ、すべて似るものなくこまかにうつくしき。顔もいとらうらうしく、もてなし

など、らうたげになよびかなり。

宣旨の君は、ささやけ人の、いとほそやかにそびえて、髪せんじのすぢこまかにきよらにて、生おひさがりのすゑより一尺ばかりあまり給へり。いと心はづかしげに、きはもなくあてなるさまし給へり。物よりさし歩あゆみて出でおはしたるも、わづらはしう心づかひせらるる心地す。あてなる人はかうこそあらめと、心ざまものうちのたまへるも、おぼゆ。

この次に、人のかたちを語りきこえさせば、物いひさがなくや侍るべき。ただいまをや。さしあたりたる人のことは、わづらはし、いかにぞやなど、すこしもかたほなるは、いひ侍らじ。

宰相の君は、北野の三位きたのさんみのよ、ふくらかに、いとやうだいこまめかしう、かどかどしきかたちしたる人の、うち見たるよりも、見もてゆくにこよなくうちまさり、らうらうしくて、口つきに、はづかしげさも、にほやかなることも添そひたり。もてなしいとびびしく、はなやかにぞ見え給へる。心ざまもいとめやすく、心うつくしきものから、またいとはづかしきところ添そひたり。

小少将の君は、そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳やなぎのさましたり。やうだいいとうつくしげに、もてなし心にくく、心ばへなども、わが心とは思ひとるかたもなきやうに物づつみをし、いと世をはぢらひ、あまり見ぐるしきまで見みめい給へり。腹はらきたなき人、悪あしざまにもてなしいひつくる人あらば、やがてそれに思ひ入りて、身をも失ひつべく、あえかにわりなきところつい給へるぞ、あまりうしろめたげなる。

宮の内侍ないじぞ、またいときよげなる人。たけだちいとよきほどなるが、あたるさま、姿すがたつき、いともものしくいまめいたるやうだいにて、こまかに、とりたててをかしげとも見えぬものから、いともきよげにうひうひしく、なか高き顔して、色のあはひ白きなど、人にすぐれたり。頭つき かんざし 額ひたひつきなどぞ、あなものきよげと見えて、はなやかに愛敬あいぎやうづきたる。ただありにもてなして、心ざまなどもめやすく、つゆばかりいづかたさまにも後めたいかたなく、すべてさこそあらめと、人のためにしつべき人がらなり。えん

がりよしめくかたはなし。

式部しきぶのおもとはおとうとなり。いとふくらけき過ぎて肥こえたる人の、色いと白くにほひて、顔ぞいとこまかによしばめる。髪かみもいみじくうるはしくて、長くはあらざるべし。つくろひたるわざして宮にはまゐる。ふとりたるやうだいのいとをかしげにも侍りしかな。まみ 額つきなど、まことにきよげなる。うち笑ゑみたる、愛敬あいけいもおほかり。

若人わかうとのなかにかたちよしと思へるは、小大輔せうたいふ 源式部みなもとのしきぶ。小大輔はささやかなる人の、やうだいいといまめかしきさまして、髪うるはしく、もとはいとちたくて、丈たけに一尺いっしやくよ餘りたりけるを、おち細りて侍り。かおもかどかどしう、あなをかしの人やとぞ見えて侍る。かたちは直すべきところなし。源式部は、丈よきほどにそびやかなるほどにて、顔こまやかに、見るままにいとをかしく、らうたげなるけはひ、ものきよくかはらかに、人のむすめとおぼゆるさましたり。

小兵衛せうひやうえせうに小貳せうひやうえせうになども、いときよげに侍り。それらは、殿上人てんじやうびとの見のこす少すなかなり。誰も、とりはずしてはかくれなければ、人ぐまをも用意するに、かくれてぞ侍るかし。

宮木みやぎの侍従じじゆうこそいとこまやかにをかしげなりし人。いと小さくほそく、なほ童わらわにてあらせまほしきさまを、心と老いつき、やつしてやみ侍りにし。髪かみの、桂うちかけにすこしあまりて、末すえをいとほなやかにそぎてまゐり侍りしぞ、はてのたびなりける。顔もいとよかりき。

五節ごせちの辨べんといふ人侍り。平中納言へいちゆうなごんの、むすめにしてかしづくと聞き侍りし人。繪ゑにかいたる顔して、額かぶいたうはれたる人の、まじりいたうひきて、顔もここはと見ゆるところなく、いと白う、手つき腕かひなつきいとをかしげに、髪は見はじめ侍りし春は、丈に一尺ばかり餘あまりて、こちたくおほかりげなりしが、あさましう分けたるやうに落ちて、すそもさすがにほそらず、長さはすこし餘りて侍るめり。

小馬こまといふ人、髪いと長く侍りし。むかしはよき若人わかうと、いまは琴柱ことぢに膠にかはさすようにてこそ里居さとゐして侍るなれ。

かういひいひて、心ばせぞかたう侍るかし。それも、とりどりに、いとわろきもなし。またすぐれてをかしう、心おもく、かど　ゆゑも、よしも、うしろやすさも、みな具ぐすることはかたし。さまさま、いづれをかとるべきとおぼゆるぞおほく侍る。さもけしからずも侍ることどもかな。

齋さい院いんに、中將ちゅうじやうの君きみといふ人侍るなり。聞き侍るたよりありて、人のもとに書きかはしたる文ふみを、みそかに人とりて見せ侍りし。いとこそ艶えんに、われのみ世にはもののゆゑ知り、心深き、たぐひはあらじ、すべて世の人は心も肝きんもなきように思ひて侍るべかめる。見侍りに、すすろに心やましう、おほやけばらとかよからぬ人のいふやうに、にくくこそ思おもう給へられしか。文書ふみかきにもあれ、「歌などのをかしからむは、わが院よりほかに誰か見知り給ふ人のあらむ。世にをかしき人の生おひいでば、わが院こそ御覽ごらんじ知るべけれ」などぞ侍る。げにことわりなれど、わがかたさまのことをさしもいはば、齋院さいいんよりいできたる歌の、すぐれてよしと見ゆるもことに侍らず。ただいとをかしう、よしよしうはおほすべかめる所のやうなり。さぶらふ人をくらべていどまむには、この見給ふるわたりの人に、かならずしもかれはまさらじを、つねに入りたちて見る人もなし、をかしき夕月夜ゆふつきよ、ゆゑある有明ありあけ、花のたより、時鳥ほととぎすのたづねどころにまゐりたれば、院いんはいと御心みこころのゆゑおはして、所のさまはいと世はなれかんさびたり。またまぎるることもなし。うへにまうのぼらせ給ふ。もしは殿なむまゐり給ふ。御とのみなるなど、ものさわがしきをもまじらず、もてつけ、おのづから知りこのむ所となりぬれば、艶えんなることどもをつくさむなかに、なにの奥おくなきいひすぐしをかはし侍らむ。かういと埋うもれ木を折り入れたる心ばせにて、かの院にまじらひ侍れば、そこにて知らぬ男に出であり、ものいふとも、人の奥おくなき名をいひおほすべきならずなど、心ゆるがしておのづからなまめきならひ侍りなむをや。まして若き人の、かたちにつけて、としのよはひに、つつましきことなきが、おのおの心に入りて、けさうだち、物をもいはむとこのみたちたらむは、こよなう人に劣おとるも侍

るまじ。

されど、内わたりにて、明け暮れ見ならし、きしろひ給ふ女御にょ 后きおはせず、その御かた、かの細殿ほそどのと、いひならぶる御あたりもなく、をとこも女も、いどましきこともなきにうちとけ、宮のやうとして、色めかしきをば、いとあはあはしとおぼしめいたれば、すこしよろしからむと思ふ人は、おぼろけにて出でる侍らず。心やすく、もの恥ぢせず、とあらむかからむの名をも惜おしまぬ人、はたことなる心ばせのぶるもなくやは。たださやうの人のやすきままに、たちよりてうち語らへば、中宮ちゆうぐうの人うもれたり。もしは用意なしなどもいひ侍るなるべし。上臈かみづつ中臈なかつづのほどぞ、あまりひき入りざうずめきてのみ侍るめる。さのみして、宮の御ため、もののかざりにはあらず、見ぐるしとも見侍り。

これらを、かくえりて侍るやうなれど、人はみなとりどりにて、こよなう劣おとりまさることとも侍らず。そのこと敏とければ、かのことおくれなどぞ侍るめるかし。されど、若人だに重りかならむとまめだち侍るめる世に、見ぐるしうざれ侍らむも、いとかたはならむ。ただおほかたを、いとかく情なさけなからずもがなと見侍る。

さるは、宮の御心あかぬところなく、らうらうしく心にくくおはしますものを、あまり物づつみせさせ給へる御心に、何ともいひ出でじ、いひ出でたらむも、後やすく恥なき人は、世にかたいものとおぼしならひたり。げに、物のをりなど、なかなかなることしいでたる、おくれたるには劣りたるわざなりかし。ことにふかき用意なき人の、所につけてわれは顔なるが、なまひがひがしきことも、物のをりにいひだしたりけるを、まだいとをさなきほどにおはしまして、世になうかたはなりと聞こしめしおぼしみにければ、ただことなる咎とがなくて過ぐすを、ただめやすきことにおぼしたる御けしきに、うち見みめいたる人のむすめどもはみないとうようかなひきこえさせたるほどに、かくならひにけるとぞ心えて侍る。